浅草オペラの時代展

～大衆文化の転換点・大正時代誕生100年を迎えて～

開催期間

2012年
1月1日日 — 7月1日日

開館時間

[火～土] 11:00 — 16:00
[日・祝] 10:00 — 17:00

休館日

毎週月曜日
※1月1日—3日は開館
※月曜日が祝日の場合は翌日
※1月4日、3月11日は臨時休館

主 催：民音音楽博物館
協 力：台東区立下町風俗資料館
寺崎裕則　清島利典　小針侑起

佐々紅華と浅草オペラ

清島利典　脚本家　日本映画監督協会会員

佐々紅華

佐々紅華は三井の生糸商である父、横浜紅蘭女学校の教師である母の間に生まれた。蔵前高等工業図案科卒業後、日本蓄音器商会の図案職を経て東京蓄音器商会に入社。そこで文芸部長として、みずから作詞作曲したお伽歌劇レコードを製作販売する。『目無し達磨』『茶目子の一日』『毬ちゃんの絵本』、山の手の瀟洒な家からそれらのレコードがくりかえし流れていた。紅華が、帝国劇場歌劇部出身の、またローシー歌劇団の歌い手との関係ができたのはこのころで、日本におけるオペラ揺籃期をそばで見ていた。帝国劇場歌劇部の挫折、ローシー歌劇団の解散をみて、紅華には期するものがあった。外国のオペラをそのまま輸入する前に、オペレッタというスタイルを通して西洋音楽に親しんでもらうことから始めなければいけない。大衆が多く集まる街、浅草こそ適地ではないか。紅華の思いに賛同する伊庭孝、石井漠をはじめ帝劇歌劇部の残党たちも渡りに舟と結集した。

大正6年秋、「東京歌劇座」が浅草日本館で旗揚げした。演目は『女軍出征』、『明暗』、『カフェーの夜』の三本である。『女軍出征』はこの年の初めに常盤座で伊庭孝の一座が外国の流行曲をとりいれて評判になった歌舞劇。『明暗』は山田耕筰作曲、石井漠の舞踊。そして、ミュージカルと銘打った佐々紅華作『カフェーの夜』。出演者には天野喜久代、杉寛、河合澄子、沢モリノらの名前が連なった。「東京歌劇座」常設館となった日本館には若者たちが押しよせた。あっというまに『女軍出征』『カフェーの夜』の挿入歌をうたう声が瓢箪池の周辺で聞こえるようになった。

やがて、解散したローシー歌劇団の清水金太郎、原信子、田谷力三たちが自ら歌劇団を組織、金龍館を常設館として『天国と地獄』『ボッカチオ』『ブン大将』『コルネビーユの鐘』『カルメン』『椿姫』などの外国オペラを公演するようになる。これに対抗するかのように佐々紅華はオペレッタを次々とつくった。金龍館の外国オペラか、日本館の和製オペラかとオペラファン（通称ペラゴロ）を二分する勢いになる。浅草六区のいくつかの劇場はオペラ専門館となり、連日休みなしに公演がつづく。そのなかでスターが生まれそれ見たさに観客が集まる。浅草のオペラは隆盛をきわめた。歌劇団が雨後の筍のようにあらわれ、そのうちオペラとは名ばかり、音楽の基礎も素養もない即席のアイドルがつくられ舞台に立つ。しだいに堕落していく舞台をながめて紅華はため息をついた。今や浅草の舞台はオペラを日本に根づかせようとする自分たちの志に背くばかりである。大正10年、佐々紅華は意を決し伊庭孝らとともに浅草をはなれ奈良県生駒山へとむかった。そこに歌劇場と養成所を創設して、日本のオペラを生みそだてる場を実現するためだった。

佐々紅華（さっさ・こうか）
本名　佐々一郎
1886（明治19）年7月15日～1961（昭和36）年1月18日

・表紙右下は佐々紅華による
「カフェーの夜」の舞台スケッチ（清島利典氏所蔵）
・写真2点も清島利典氏所蔵